イエスのまなざし【つのぶえ 15 年 1 月号掲載】

郡山での暮らしから④

今年 3 月 11 日で大震災から５年目を迎えます。復旧・復興は進んでいるのでしょうか。年々減少傾向にあるとは言え、今なお 26 万人余の人たちが避難生活を送っていますし、10 万人余の人たちは 5 年目の仮設住宅での暮らしを余儀なくされています。復興住宅・災害公営住宅の整備と宅地の供給は被災者の望む通りにはいかず、災害公営住宅の計画はわずか４％弱しか達成されていません。住宅用地、人手、建築資材の不足に加え、土地や資材の高騰も復興が進まない要因の一つです。2020 年の東京オリンピック開催も影響を与えています。産業の復旧状態はというと、建設業や運輸業に比べ地場産業の水産・食品加工業や卸小売り、サービス業の復興が大幅に遅れています。このような状況が、さまざまな事業体の大幅な減少につながり、いまだに生活再建の目途が立たずにいる人たちも大勢います。被災地域からの人口流出に歯止めをかけることもできません。

ことに福島県は、放射能汚染レベルによって帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域と 3 つに分かれている地域を抱えていて、各地域とそこに生活していた人たちの状況がそれぞれ違います。汚染のために立ち入れない地域もあります。そのために、福島県内での復興・復旧は岩手、宮城両県に比べ大幅に遅れています。現在、被災者のための復興公営住宅の建設が進められていますが、生活再建への道のりは程遠く、ほとんどの人は、除染や復旧・復興が進んでいるという実感を持てずにいます。

残念なことに、５年目を迎えようとしている今、マスコミも含め人々の関心が日ごとに薄れゆくのを実感します。早く故郷に帰りたい。家族一緒に暮らしたい。何の心配もせず、好きな時に好きなだけ外遊びをしたい、させたい。洗濯物を屋外に干したい。散歩やジョギングがしたい。震災前のようにわだかまりなく、おしゃべりをしたい。何気ない日常が奪われています。これらは、過去のことではなく、今を生きる人たちの痛切な声です。今年こそ、被災者の心に寄り添いながら、少しでも明るい未来に向けた歩みを進めることが出来たらと、願ってやみません。

（原発と放射能に関する特別問題プロジェクト　池住　圭）